

初期スウィフトの詩 (1)

岸本 広司

『桶物語』や『ガリヴァー旅行記』などで知られるジョナサン・スウィフトは、生涯にわたって多くの詩を書いている。そのほとんどは、散文による諷刺作品と同様、風俗詩や社交詩、とりわけ皮肉、嘲笑、ブラック・ユーモアなどを交えた諷刺詩である。さらに、スカトロジカルな「女性嫌悪詩」まで書いている。だが彼の最初期の詩は、特定個人の美徳や功績を褒め称えた「真面目」な頌詩であり、のちの詩篇とは内容的にも形式的にも大きく異なっている。本稿は、サー・ウィリアム・テンブルの秘書をしていたムーア・パーク時代の若きスウィフトが、何ゆえに自身の好みや気質からかけ離れた頌詩を書いたのか、その理由と詩作の背景を、エイブラハム・カウリーやテンブルの影響と関わらせながら考察する。

Keywords : ジョナサン・スウィフト, エイブラハム・カウリー, サー・ウィリアム・テンブル, 頌詩

1. スウィフトとカウリー

22歳になったジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) は、一切の公職から退いて隠遁生活を送っているサー・ウィリアム・テンブルの秘書になった。スウィフトがサリー州ムーア・パークのテンブルの屋敷にいたのは、1689年末から90年5月、91年末から94年5月、96年6月から99年3月頃までの約6年間である。この秘書時代に、正確には1690年頃から93年の間に、彼は何篇かの詩を書いている。聖職に就く前のスウィフトは、詩人として世に出たいと考えていた。彼が詩人になりたいと思ったのは不思議ではない。著述家のパーシヴァル・ストックダールが、「偉大な詩人は、偉大な散文作家よりも優れた存在である。一流の詩人であるためには、他の卓越したいかなる知的能力よりも広くて高雅で味のある知性を要し、力強く豊穡、かつ情熱的で調和のとれた想像力が必要である⁽¹⁾」と述べたのは、小説が市民権を獲得してすでに久しい19世紀の初めである。スウィフトがテンブルの屋敷にいたのはそれより1世紀以上も前のこと、詩の権威は散文の比ではなかった。文学とは何よりも詩のことであり、文学に憧れを抱く若者ならば、その多くが詩人を目指して創作していた。そして諷刺作家になる前のスウィフトも、その一人であった。25歳前後のスウィフトが日々詩作に励み、悪戦苦闘し

ている様子は、ジョン・ケンドルとトマス・スウィフトに宛てた書簡からも明らかである。

「当地(ムーア・パーク)へ来て7週間経ちました。私はほとんどあらゆる種類の主題について、おそらくイングランドの誰よりも書いては燃やし、燃やしては書いています。⁽²⁾」

「あなたが1篇の詩を書き上げたということを知り、私はすっかり興奮しています。なるほどその詩には、あなたの他の詩と比べると欠点があります。でも私には、とても2、3日で書けるようなものではありません。……私は朝の2時間を詩の習作に充てています。ただし、それは気分が乗っているときだけで、その時間は一日の中でも最良のひとつだと思っています。そのようにして、私は果敢に詩を書いています。それでも、1週間に2スタンザ以上書くことは滅多にありません。私の言っているのは、ピンダロス風頌詩のことです。……1週間かけても2スタンザ以上は無理かもしれず、すべて書き上げても、100回手直しします。でも自分では、才能の枯渇した下手な書き手だとは思っていません。⁽³⁾」

この時期に書かれた詩が6篇残っている。タイトルは次のとおりである。

「国王に寄せる頌詩」(“Ode to the King,” 1735, writ. 1690-91)

「アテネ協会に寄せる頌詩」(“Ode to the Athenian Society,” 1692)

「サー・ウィリアム・テンプルに寄せる頌詩」(“Ode to the Honourable Sir William Temple,” 1745, writ. 1692/93)

「ウィリアム・サンクロフト博士に寄せる頌詩」(“Ode to Dr. William Sancroft,” 1789, writ. 1692)

「コングリーヴ氏に」(“To Mr. Congreve,” 1789, writ. 1693)

「サー・ウィリアム・テンプルの最近の病気と快癒に際して」(“Occasioned by Sir William Temple’s Late Illness and Recovery,” 1789, writ. 1693)

タイトルからもわかるように、これらは頌詩である。そのうち、前の4篇はピンダロス風頌詩、残りの2篇はヒロイック・カプレット（英雄詩体二行連句）である。「頌詩」(ode)とは、ギリシア語で「歌」を意味し、楽器の伴奏に合わせて合唱隊によって歌われた詩を総称したものである。やがてそれは、複雑な韻律構成によって、崇高な主題や典雅な感情を詠い上げる抒情詩の一形式を指すようになった。古典的な頌詩としては、「ピンダロス風頌詩」(Pindaric ode)と「ホラティウス風頌詩」(Horatian ode)がある。前者は、古代ギリシア最大の抒情詩人ピンダロスに由来する。オリュンピアなどの四大競技会における勝利者を称える合唱祝勝歌で有名なピンダロスは、壮大な文体、華麗な用語、複雑な韻律、自由な想像と比喩を駆使し、絢爛と難解さをもって知られている。後者は、ローマの詩人ホラティウスを範とする定型の韻律形式を持った簡潔な詩形で、ピンダロス風頌詩とは対照的に、私的・静的・瞑想的であることを特徴とする⁽⁴⁾。

イングランドにおける頌詩の受容は、16世紀ないし17世紀に始る。まずピンダロス風頌詩では、ベン・ジョンソン、ジョン・ミルトン、エイブラハム・カウリー、ジョン・ドライデン、トマス・グレイなどが、またホラティウス風頌詩では、サリー伯ヘンリー・ハワード、トマス・ランドルフ、ロバート・ヘリック、アンドルー・マーヴェルなどが有名である⁽⁵⁾。その中でも、スウィフトとの関係で重要なのはカウリーである。最後の「形而上派詩人」(metaphysical poets)と言われ、ジョンソン博士の『イギリス詩人伝』(*The Lives of the English Poets*, 1779-81)の冒頭に据えられたカウリーは、エドモンド・スペンサーの『神仙女王』(*The Faerie Queene*, 1590, 96, 1609)で文学に目覚め、15歳の若さで最初の詩集『詩の華』(*Poetical Blossoms*, 1633)を出版するという早熟の詩人であった。ケンブリッジ大学に学び、内乱に際してはチャールズ1世を支持

する立場をとったため大学を追われ、王党派の牙城であるオックスフォードに移った。その後フランスに逃れ、パリで亡命王妃に仕えている。その間、本国で恋愛詩集『ザ・ミス・トレス』(*The Mistress*, 1647)が刊行され、絶大な人気を博した。王政復古後イングランドに帰国するが、期待していたほどの恩賞にありつけず、失意のうちに地方に隠棲、49歳で没した。旧約聖書を題材とした叙事詩『ダビデ賛歌』(*Dauides*, 1656)、頌詩の流行をもたらした『ピンドロス風オード』(*Pindarique Ode*, 1656)、ラテン語の長詩『植物誌』(*Plantarum libri*, 1662)などが知られている⁽⁶⁾。

カウリーの名声と影響力は絶大であった。亡くなった翌年の1668年に、トマス・スプラットのカウリー伝を付した『エイブラハム・カウリー作品集』(*The Works of Mr. Abraham Cowley*)が刊行され、1721年までに12版を重ねている。このことから、彼の人気のほどをうかがい知ることができよう。とりわけ王政復古期には多くの詩人たちから称賛され、押韻構成に不規則なパターンを持つ独自の頌詩が広く模倣された⁽⁷⁾。ちなみにジョンソン博士は、カウリーの「不規則な韻律は……瞬く間に流行の詩風となった。すべての少年少女たちは、この魅惑的な流行に飛びつき、ほかのことはできずとも、ピンダロス風に書くことができた⁽⁸⁾」と言っている。カウリーを愛好し、その影響下にあった著名な詩人としては、ロチェスター伯、ジョン・オールダム、ジョン・ドライデンなどがいる。カウリー熱は18世紀に入るとしだいに衰え、やがてその趣味は時代遅れなものになっていったが、往時には熱烈な崇拜者が数多くいたのである⁽⁹⁾。そしてスウィフトもカウリー崇拜者の一人であり、そのキャリアを熱烈なカウリストとして開始したのである。彼は従兄弟に宛ててこう書いている。「自分の気に入ったものが書けたときは、私の中にまるでカウリーがいるようです。だから100回でも読み返すことができます⁽¹⁰⁾」。

2. 詩人スウィフトとその評価をめぐって

ところで、スウィフトが詩人になることを目指していたことは先に述べたとおりであるが、彼は『桶物語』や『ガリヴァー旅行記』などを著した散文作家というのが一般的な受け止められ方で、詩人スウィフトというイメージはあまりないのが実情であろう。スウィフトの詩は散文作品の陰に隠れて永きにわたって等閑視され、時には侮蔑すらされてきた。しかし生涯にわたって詩作しており、『スウィフト全詩集』(*Jonathan Swift: The Complete Poems*, 1983)の編者パット・ロジャーズによれば、スウィ

フトは生涯において280篇もの詩を書いている⁽¹¹⁾。散文作家として名を成してからも詩への情熱は衰えず、むしろ年齢を重ねるにつれて、詩作活動は旺盛になっているのである。ちなみにロジャーズによれば、51歳から60歳までの間が一番の多作期で、全詩の約46パーセント、次いで多いのが61歳以降で、36パーセントの詩がこの時期に作られている⁽¹²⁾。

「私の詩の水源は干上がってしまいました。告白しますが、私はしだいに無味乾燥な人間になっているので、1つの押韻を見つけるのは、1ギニー金貨を見つけるのと同じくらい困難です⁽¹³⁾」。こう書いたのは、スウィフト65歳、持病のメニエール病が悪化し、心身ともに衰えが目立つようになっていた頃である。これ以降出版された散文作品は、『洗練された会話』(*Polite Conversation*, 1738)と『奴婢訓』(*Directions to Servants*, 1745)の2篇程度であった。しかもそれらは、何年も前から継続して書かれていたものであり、新たに書き下ろされたものはほとんどないというのが実情であった。だが詩作の方は辛苦しながらも継続し、「さる貴婦人に」(“To a Lady,” 1733)、「詩について——ラブソディ」(“On Poetry: A Rhapsody,” 1733)、「リージョン・クラブの特徴、賛辞および説明」(“A Character, Panegyric, and Description of the Legion Club,” 1736)といった作品を、66歳になってからも長短織り交ぜて何篇か書いているのである。

もっとも、スウィフトは「私は韻文を、それもくだらないものを詠んできた人間にすぎず、真面目な二行連句をこれまで一度も書いたことはありません⁽¹⁴⁾」と、彼にしては珍しく謙遜した言い方をしている。だが、歳をとっても詩作への飽くことなき意欲を考えるならば、たとえ「くだらない」内容のものであろうとも、彼の詩をまったく無視することは許されないであろう。とりわけ機知と諧謔に満ちた数々の詩篇は、スウィフトの諷刺の本質を捉えるためにも看過してはならない重要なテキストであるように思われるのである。

文学史を振り返ればわかるように、スウィフトの詩は一般的に低い評価しか与えられてこなかった。その理由の1つは、彼の詩の多くが、神や英雄を称えて格調高く歌い上げる叙事詩などとは違って、文学的に価値が一段低いと見なされがちな風俗詩や社交詩、また皮肉、嘲笑、ブラック・ユーモアなどを交えた好悪の分かれる辛辣な諷刺詩であったからである。しかもその内容が、人間や社会の悪徳、悪習、腐敗、愚劣さ等を非難攻撃するだけでなく、時には対象の汚点や弱点を暴き出し、それらを解剖学者のように腑分けして、卑しく醜い姿を拡大鏡で観察す

るかのごとく、細部に至るまで詳細かつリアルに描写した点にある。その代表は、物議を醸したスカトロロジカルな一連の「女性嫌悪詩」、いわゆる「印刷するのに適さない詩」(unprintable poems)であるが、彼は一切のきれいごとを排除して、人間や社会の裏面を悪臭漂わせながら執拗に描いた。そこには詩の崇高さや抒情性はない。ちなみに、スウィフトの若い友人のピルキントン夫人によれば、彼女の母親がスカトロロジカル詩の頂点と言われるスウィフトの「貴婦人の化粧室」を読んだ途端、気分が悪くなって食べた物を吐いたという⁽¹⁵⁾。

スウィフトより100年以上も前、深い教養と雄々しさによりエリザベス朝宮廷の華と謳われたサー・フィリップ・シドニーは、「詩は嘘をつく技芸ではなく真の教えであり、人の心を軟弱にするのではなく勇気を著しく奮い立たせるものであり、人間の知性を悪用するのではなく強化するものであり、プラトンによって追放されたのではなく敬意を払われたものである⁽¹⁶⁾」と『詩の弁護』(*The Defence of Poesie*, 1595)で述べていた。シドニーにとって詩とは、美德を教え、尚武の心を育て、知識を涵養し、信仰心を高めるなど、人間の精神を向上させるものにはほかならなかった。それゆえ、シドニー流のこうした気高い詩観を持った者からすれば、対象の隠れた部分を抉り出し、その醜悪な様を赤裸々に描いたスウィフトの詩は、不快感や嫌悪感を催させる俗悪な書き物にすぎず、とうてい受け入れることのできない低レベルの代物であったのである。

スウィフト批評の大半は、彼には品性が欠けており、純粋な詩的衝動も感性もなく、内容的にも形式的にもとうてい詩人とは言えない、といった類のものであった。たとえば、彼の同時代人で『ガリヴァリアーナ』(*Gulliveriana*, 1728)を著したジョナサン・スメドレーは、「スウィフトの資格や称号は決して詩人と言えないものではない。彼は、言葉の真の意味で詩と呼べるような作品をただの1篇も書いていない⁽¹⁷⁾」と厳しい評価を下している。また、スウィフトの友人で彼の伝記を著したオレリー伯爵ジョン・ボイルも、スウィフトの平明で簡潔な文体、空想や観念の飛翔、ユーモアの豊かさなどを称賛しながらも、その詩は「取るに足りない不真面目なもの」が多く、「われわれの心にごくわずかな印象しか残さない⁽¹⁸⁾」と酷評している。さらにある匿名氏も、1790年の『ヨーロッパ・マガジン』(*The European Magazine*)で、スウィフトの詩の「韻律は平易で、ユーモアには気取りが無い。だが……それらは韻を踏んだ散文以外の何ものでもない⁽¹⁹⁾」と述べているのである。

こうした厳しい評価は、19世紀になっても基本的に変わらない⁽²⁰⁾。1814年にサー・ウォルター・スコットの編纂した『ジョナサン・スウィフト作品集』(*The Works of Jonathan Swift*)が刊行されると、『エディンバラ・レビュー』(*The Edinburgh Review*)の編集者兼主筆のフランシス・ジェフリーは、スウィフトの詩を同誌で次のように評した。「スウィフトの詩について、語られるべき重要なものがあるとは思わない。なぜならば、彼はいかなる点においても詩人であった、ということに確信を持ってないからである。……スウィフトは非常に多くの諷刺文(lampoon)、寸鉄詩(epigram)、諷刺的バラード(satirical ballad)、罵倒ソング(abusive song)を書き、大きな成功を収めた。だがそれらは詩ではない。……スウィフトの作品には、火のようなきらめきもなければ、心を高鳴らせるものもない。……彼の様式は単なる散文にすぎないのである⁽²¹⁾」。

同様の批評はさらに続く。文学史家・思想史家として有名なレズリー・ステイーヴンは、スウィフトの詩は「韻を踏んだ散文」(rhymed prose)であり、もし彼を詩人と呼ぶべきならば、「彼のために詩人を新しく分類する必要がある⁽²²⁾」と述べた。詩人・批評家・ジャーナリストであるリー・ハントの評言も紹介しておこう。彼は1846年に、チョーサーからジョン・ウォルコットまでの詩人18名の詩篇を収録した『機知とユーモア』(*Wit and Humour*)を出版した。その中にスウィフトも含まれ、5篇の詩が収められている。ハントはまずこう言う。「スウィフトの機知とユーモアはこの上なく素晴らしく、今も昔も彼より優れた者はいない。スウィフトにはアリストファネスの詩情も、ラブレーの動物精気もない。彼は、バトラーのように矢継ぎ早にジョークを飛ばす人間ではなかった。スウィフトにはアディソンの繊細さ、スティールやフィールディングの温厚さ、スターンの哀感と深さは備わっていないものの、彼の機知そのものは完璧であった⁽²³⁾」。こうして、ハントはスウィフトを一面では高く評価する。にもかかわらず、詩に対する見方は総じて厳しかった。「結局のところスウィフトの詩は、ポーブやバトラーのそれと比較すれば、まったく気の利いた散文(smart prose)の一種でしかない。彼の詩には、ポーブやバトラーのような想像力に富んだ表現が欠けているのだ⁽²⁴⁾」。

19世紀におけるスウィフトの詩に対する厳しい評価は、イギリスだけにとどまるものではなかった。アメリカの詩人で文芸批評家のジェイムズ・ローウェルも、「われわれの普通の母親の裸体をさらすことに喜びを感じたスウィフトの薄汚いシニシズム⁽²⁵⁾」

と、彼の人間性そのものに強い非難の言葉を浴びせている。そうした人間性との関連で、スウィフトの「非情さ」や「残忍性」を批判しつつ、彼の詩全体に最も厳しい姿勢を示したのは、人間の生涯や芸術の展開を自然科学的見地から考察し、その法則を解明しようとしたフランスのイポリット・テーヌであろう。

「スウィフトは、陽気なときにも常に悲劇的であり、何ものも彼を和らげることがない。人にかしなくときですら人を傷つける。……/このような精神は、詩によって和らげられるであろうか？ 他の分野と同じく、ここにおいても彼ほど不幸な者はいない。彼は、会話の生き生きとした閃きからばかりか、想像力の大きな恍惚からも疎外されている。崇高さにも快さにも出会うことができず、芸術家の熱狂も、社交人の気晴らしも持ち合わせていない。……彼の詩に最も欠けているもの、それは詩情である。実証的な精神は、詩情を愛することも理解することもできない。それを一つの機構または様式としてしか見なさず、虚栄または慣習によってしかそれを作成しない。……私は、自然の真の感情を示す詩句をたった1行たりとも思い起こせない。彼は森の中には薪しか見ず、畑には穀物袋しか見なかったのである。⁽²⁶⁾」

スウィフトの詩に対する批判的言辭は、これら以外にも数多く例示することができよう。もっとも、すべての者がスウィフトを批判していたわけではなく、彼の詩の中に優れた価値を見出していた文人がいたことも事実である。たとえばオリヴァー・ゴールドスミスは、「詩について——ラブソディ」を英語で書かれた詩の中でも傑作と激賞していたし⁽²⁷⁾、ジョンソン博士やウィリアム・ハズリットも高く評価していた⁽²⁸⁾。だがそれらは少数で、見てきたように、ほとんどの者が厳しい眼差しを向けていたのである。

スウィフトの詩に対する評価が変化したのは、20世紀に入ってからである。すなわち、彼の詩は早くからいくつかの詩集や著作集に収録されていたが⁽²⁹⁾、それらは必ずしも厳密な校訂を経たものではなかった。そうした状況を変える契機となったのは、1929年出版のF・エルリントン・ボールによる『スウィフトの韻文——エッセイ』(*Swift's Verse: An Essay*)である。同書はスウィフトのテキストを確定し、それらを伝記的文脈に位置づけ、書かれた年代順に配列しながら詩の特徴を明らかにしようとしたきわめて重要な詩論であった。そしてその8年後、ハロルド・ウィリアムズの編纂した『ジョナサン・スウィフトの詩』(*The Poems of Jonathan*

Swift, 1937) が3巻本で刊行された。これは、スウィフトの作とされてきた約400篇の詩を吟味し、そのうちの約250篇を真作と認めて収録するとともに、それぞれの詩に書誌情報と解釈上のコメントを付した画期的な詩集である。とりわけ1958年の第2版は、新たに発見された詩稿やより詳しい書誌情報を加えており、スウィフト詩を研究するうえでの必須のテキストとなった⁽³⁰⁾。事実、これによって研究の機運が生まれ、彼の詩をめぐる論考が、モーリス・ジョンソンの『機知の罪——詩人としてのジョナサン・スウィフト』(*The Sin of Wit: Jonathan Swift as a Poet*, 1950)を嚆矢として、陸続と発表されてきたのである⁽³¹⁾。

こうしてスウィフト詩の研究は、散文作品ほどではないにせよ、質・量ともに確実に高まってきた。もちろん彼の詩は、歴史に名を残す偉大な詩人たちのものと比較すれば、格調の高さ、優雅さ、抒情性などにおいてとうてい太刀打ちできるものではない。だがスウィフトの本領は諷刺である。諷刺詩に限定して見れば、評価はむしろ逆となろう。既述のように、彼の諷刺を解明するためには、散文作品だけでなく詩も考察対象にする必要がある。しかもスウィフトの詩は、そのほとんどが、彼の生きた時代や彼の人生そのものと密接に関連したところで書かれている。そしてそこにこそ、彼の詩の特徴の1つがあるのである。つまり、スウィフトのほぼすべての散文作品がそうであるように、詩もまた彼を取り巻く環境の中で、多様な形で生じたさまざまなトピックスへの、いわば応答として書かれているのである。

かつてジョン・I・フィッシャーは、「スウィフトの詩の主たる価値は、詩の主題に関してわれわれに語るものではまったくなく、むしろその作者についてわれわれに教えるものである⁽³²⁾」と述べたことがある。フィッシャーの言の前半部分は首肯し得ないとしても、後半部分の指摘は正しい。というのもスウィフトの詩は、多くの伝記的要素を含み、詩そのものがスウィフト自身を雄弁に語っており、それらを通して彼の人生の軌跡をかなりの程度辿っていくことができるからである。それゆえスウィフトを等身大に捉えるためには、詩を重要なテキストとして位置づけるべきであろう。前出したボールも、「スウィフトの韻文を知らなければ、彼の実像は描けない⁽³³⁾」と言っている。われわれも、ことさらに「作者の死」を言うのではなく、むしろ作品の背後には、作品のために「考え、悩み、生きる⁽³⁴⁾」存在としての「作者」、すなわちスウィフトがいることを前提としながら議論していく必要がある。こ

うした理由から、スウィフトを研究するにあたっては、彼の詩を可能なかぎり取り上げ、作者と作品の間を往還しながら論じていきたい。

3. テンプルの詩論

ところで、若きスウィフトは詩人になることを目指し、25歳前後に6篇の詩を書いていた。しかしそれらは、アテネ協会に寄せた1篇を除いて、特定個人の徳や功績を褒め称えた頌詩であり、のちに書かれる風俗詩や諷刺詩などとは大きく異なっている。もっとも、後述するように、初期の詩篇に諷刺の傾向がまったくないわけではない。だが基本的には諷刺詩とは対極的な、嘲りも皮肉も笑いもない「真面目」な詩であった。彼はトリニティ・カレッジ時代に、大学当局を諷刺したトライポス演説の作成に関与したと言われてきた⁽³⁵⁾。その確たる証拠はないが、もしそれが事実であるとすれば、スウィフトは学生のときから諷刺を好み、少なくとも、その傾向を持っていたと言えることができる。その彼が、およそ諷刺的でない、むしろそれとは真逆の詩を書いているのである。それは何ゆえであろうか。彼の気質や好みからかけ離れた詩が、いかなる理由から、またいかなる背景の下で書かれたのであろうか。

言うまでもなく、スウィフトを頌詩の魅力に取り憑かせたのは、しばしば名前を出してきたカウリーである。カウリーは、イングランドでピンダロス風頌詩を流行らせた最大の功労者であった。ジョンソン博士が、「すべての少年少女たち」が「この魅惑的な流行」に飛びついたと言ったのも故なきことではない。カウリーのピンダロス風頌詩は、17世紀の後半には絶大な人気を誇っていた。スウィフトが詩に興味を持つようになった学生時代は、カウリー熱がピークを迎えていた時期である。当時の「少年少女たち」と同様、彼もその流行に飛びつき夢中になった⁽³⁶⁾。しかし、スウィフトを頌詩の世界に誘ったのは、一人カウリーだけではなかった。カウリーと同等、あるいはそれ以上にスウィフトに影響を与え、諷刺よりも頌詩へと向かわせたのは、彼のパトロンであるテンプル卿であった。

よく知られているように、テンプルは優れたエッセイの書き手であった。それらは『雑纂』(*Miscellanea*, 1679, 90, 1701) 3部作として出版されたが、スウィフトへの影響を考察するにあたって重要なのは、第2部に収められたエッセイ『詩について』(*Of Poetry*, 1690)である。このエッセイは、詩の起源・歴史・力・主題・作風・形式等を包括的に論じており、テンプルの詩観のみならず、17世紀の文学批評を知るうえにも重要な詩論である⁽³⁷⁾。

このエッセイの詳しい考察は別な機会に譲るとして、詩と詩人の持つ神的な力を洞察していたテンプルは⁽³⁸⁾、若いときから詩に強い憧れを抱いていた。そして偉大な詩人たち、とりわけギリシアやローマの詩人たちを称揚していた。

テンプルが好んだ詩は叙事詩であり、とくに気に入っていたのはホメロスとウェルギリウスであった。テンプルは彼らの詩の特徴を比較検討している。ホメロスの詩が「より熱気があって恍惚とした様である」のに対して、ウェルギリウスの方は「より軽やかで機敏である」。そして前者が「より驚異的」であるのに対して、後者は「より快適」である⁽³⁹⁾。このように、2人の詩は好対照をなすと言うが、ホメロスもウェルギリウスもその詩才は無比であった。「不朽の名声を持ったこの2人は、詩人の中であまりにも卓越していたので、いかなる比較も許さず、対抗心すら失わせ、ある意味で真の詩とは、彼らの使った言語〔ギリシア語とラテン語〕のみならず、彼らの個性そのものでもあり、それら以外にはないことを認めなければならない⁽⁴⁰⁾」。

テンプルによれば、詩は一般的に称賛、教訓、物語、愛、悲嘆、非難を主題として詠まれてきた。その中でも、われわれの注目すべきは「称賛」(praise)である。「称賛は聖書に出てくるあらゆる詩歌や賛美歌の主題であり、オルペウス賛歌、ホメロス、および他の多くの主題、神々を称えるために作られたローマの世俗曲の、美徳ないし有徳の士を褒め称えたピンダロス、ステシコロス、テュルタイオスたちの主題であった⁽⁴¹⁾」。前述したように、テンプルは神々や英雄の事績を褒め称える叙事詩を好んでいた。そこにおいて重要なのは、言うまでもなく「称賛」である。逆に忌避されるのは、冷笑や侮蔑を含んで悪口を浴びせかける「嘲り」(ridicule)である。そしてテンプルが言うには、実はこの嘲りこそが詩を墮落させてきた原因の1つであった。「現代の詩を墮落させるのに手を貸してきたのは、嘲りという手法である⁽⁴²⁾」。

詩における嘲りは、「古典作家たちの間ではほとんど知られていないか、ほとんど評価されていなかった⁽⁴³⁾」。ところが会話の中で嘲りが流行すると、人を楽しませる方法として、詩の中にも取り入れられるようになった⁽⁴⁴⁾。詩における嘲りの流行は、ラブレーから始まるとテンプルは言う。テンプルは、ラブレーに対して明らかに批判的であった。たしかにラブレーは、「機知のみならず、広範囲にわたる優れた学識の持ち主であった」。にもかかわらず、彼は嘲りの手法を用いて「ひどく悪意に満ち、非常に淫らで冒瀆的なものをたくさん書いた⁽⁴⁵⁾」。テン

プルにとって嘲りは、詩のみならず、人間の道徳的美質にとっても甚だ有害であった。なぜならば、嘲りは冷笑罵倒することによって人の心を傷つけ、自信や希望を失わせ、その結果、有意な行動を思いとどまらせてしまうからである。

テンプルはプライドが高く、不遜で気難しい一面があった。しかし彼は、高い教養、洗練された作法、礼儀正しさ等を身に付けた典型的な英国紳士であり、誠実さと信頼こそを対外交渉時における最も重要なマインドとする理想家肌の外交官であった。ユーモアは解しても、人を揶揄したり愚弄したりするような言動は、彼の生真面目な性格から、また偉大さや高潔さを尊ぶ倫理観から決して容認できるものではなかった。「〔詩人は〕すべてのものを茶化す(burlesque)よりも、人びとの優れた点を実際の価値以上に評価して褒める〔べきである〕⁽⁴⁶⁾」。このように言ったのは、『詩について』より23年も前のある書簡においてであった。テンプルの姿勢は、その後もまったく変わることはなかったのである。

こうしてテンプルは、詩における嘲りを非難した。彼はラブレーのほかに、疑英雄詩『奪われた手桶』(La secchia rapita, 1622)を書いたイタリアの詩人アレッサンドロ・タッソーニ、非国教会派を諷刺した『ヒューディブラス』の作者サミュエル・バトラー、ウェルギリウス『アエネーイス』(Aeneis)の低俗調バーレスクである『スカロニデス』(Scarronides, 1664-65)の著者チャールズ・コットンたちにも懐疑的な眼差しを向けている⁽⁴⁷⁾。またラ・ロシュフコーに対しても、『雑纂』第3部に収められた短いエッセイで批判的に言及している⁽⁴⁸⁾。テンプルからすれば、彼らの「意図、習癖、实例は、詩にとって、いや実のところ、人間のあらゆる美徳と良き品性にとって致命的である。人びとは、自分たちがどれほど不当に嘲弄されているか、そして悪人や罪人はもちろん、善人や無垢な者までも一緒に嘲る空気に支配されているかを知って、まったくやる気をなくしてしまうに違いない⁽⁴⁹⁾」。要するにテンプルは、皮肉であれ嘲りであれ、人を小馬鹿にして嘲笑うがごとき態度は、とうてい受け入れることができなかったのである。それゆえに、彼は諷刺的なものを嫌った。そして韻文・散文を問わず、諷刺文学を遠ざけた⁽⁵⁰⁾。ちなみに彼は、「正しい詩」(just poem)という表現を使っている。この言葉を用いる際、諷刺詩は、バラードや哀歌などとともにその範疇から除外されている⁽⁵¹⁾。テンプルの考えでは、「正しい詩」とは、あくまでもホメロスやウェルギリウスのような格調高い叙事詩のことであり、諷刺詩は、そのカテゴリーにおよそ入り得るようなもの

ではなかったのである。

テンブルは、数は少ないものの何篇かの詩を書いている。ホメロスとウェルギリウスの訳詩数篇、自作詩数篇である⁽⁵²⁾。それらは、諷刺的なものを嫌い、叙事詩を「正しい詩」と見なす自らの詩論に則る形で書かれており、いわば理論の実践化であった。テンブルの詩や詩論の特徴の1つは、個人の事績の重視である。彼は、文明や社会の進歩は偉大な人物たちの努力の賜物と考えていた。彼は詩論のみならず、他のエッセイや回想録でも偉人たちを称えている。これは時代の傾向であったと言えようが、テンブルという一人の人間の個性でもあった。

執筆時期は不明ながら、テンブルは『英雄の徳について』(Of Heroic Virtue, 1690)と題したエッセイを書いている。『詩について』の姉妹編で、テンブルの政治思想を明らかにするうえできわめて重要なエッセイである。詳細はここでは控えるが、このエッセイでテンブルは、英雄の徳とは「賢明さ、善良さ、および不屈の精神において、並みの人間を超えた生得の優れた気質や特殊な才能⁽⁵³⁾」のことであり、それ自体、詩と同じく神的と呼び得るほど卓越した能力である、と述べている。テンブルの考えでは、詩と英雄の徳はともに人びとに喜びを与え、社会を文明化し、ひいては国を発展させ得る力を持つものであった。その点で、詩人と英雄はパラレルな関係にあり、いわば兄弟のようなものであった。『詩について』は、歴史上の多くの英雄たち、すなわちダビデ、ソロモン、リュクルゴス、ソロン、アレクサンドロス、スキピオ、カエサルたちが、それぞれ詩と密接な関係を持っていたことの説明で終わっている。テンブルによれば、ある者は「最善の詩人」であり、ある者は詩の熱心な愛好者、もしくは詩人の崇拜者であった⁽⁵⁴⁾。われわれはこの一点からも、テンブルが詩と英雄の徳、そして詩人と英雄をいかに強い繋がりの中で捉えていたかを知ることができよう。テンブルにとってそれらは、まさしく表裏一体の関係にあり、その意味で、詩と政治は不可分の関係にあったのである。

4. テンブルの影響をめぐって

さて、われわれはテンブルの詩論をやや詳しく見てきた。彼のこうした詩の捉え方や考え方が、スウィフトに直接的・間接的に影響を与えたことは明らかであり、そのことについてもはや多くを語る必要はないであろう。たしかに、スウィフトを頌詩に向かわせたのは、まずもってカウリーであった。また、エドモンド・ウォラーやジョン・ドライデンの影響も無視することはできないであろう。だが、彼らか

ら感化されていたことは間違いないとしても、彼らよりもいっそう強く、より大きな影響を及ぼしたのはテンブルであった。スウィフトは、テンブルの秘書として日常的に彼の思想や著作に接していた。「私は、現在のイングランドではサー・ウィリアム・テンブルの作品を一番気に入っています。これはほとんど自己愛の1つだと思います。気質がよく似ていますから、まるで自分の作品のように好きになってしまうのです⁽⁵⁵⁾」。このように述べたのは、ムーアパークのテンブルの屋敷でちょうど頌詩を書いていた頃である。この時期のスウィフトは、テンブルを心から尊敬していた。テンブルの考え方に、自然と染まっていたかもしれない。あるいはテンブルから、彼の理想とする詩形や主題が、半ば強制的に勧められていた可能性もある。少なくとも、皮肉や嘲りを含んだ諷刺詩を遠ざけて、ひたすら個人の善良さや美徳を称え、その事績を詠うよう方向づけされていたように思われる。スウィフトの初期の詩篇を子細に検討すれば、テンブルの詩観が色濃く反映されているのをはっきりと見てとることができる。ジェラルド・J・ピエールも言うように、若きスウィフトにとって、カウリーが彼の「アイドル」であったとすれば、テンブルは「教師兼批評家」であった⁽⁵⁶⁾。そしてスウィフトは、テンブルの強い影響の下で、いわば彼の手のひらで転がされるがごとく詩作していたのである。

しかしながら、スウィフトがテンブル好みの詩を書いたのは、必ずしも上記のような理由からだけではないであろう。教会のポストを希望していたスウィフトには、テンブルの口添えが必要であった。とりわけ高位聖職者への出世コースに乗るためには、パトロンを怒らせてはならず、政界の有力者に快く推薦してもらわなければならなかった。スウィフトが頌詩を書いた理由の1つには、スウィフトのこのような事情や思惑があったように思われる。したがって若書きの詩篇、なかんずく「サー・ウィリアム・テンブルに寄せる頌詩」は、テンブルへのオマージュであるとともに、彼に対する阿諛ないし忠誠心の表明でもあったのである。

ともかくも、青年スウィフトは意識的・無意識的にテンブル好みの詩を書いた。だがそれは、スウィフトの諷刺の才能が開花するのを阻害するものでもあった。やがてスウィフトはそのことに気づき、詩の形式や内容を変えていくようになる。そしてそれはテンブルの影響から脱却し、文学的・精神的・経済的に自立して、諷刺作家としての自己を確立していくことを意味するものにほかならなかった。われわれは、初期スウィフトの詩を分析しながら、そのプ

ロセスと彼の心のうちを見ていこうと思う。それが次稿のテーマである。

-
- (1) Percival Stockdale, *Lectures on the Truly Eminent English Poets*, 2 vols. (London, 1807), II, p. 37.
- (2) Swift to the Rev. John Kendall (11 Feb. 1692), *The Correspondence of Jonathan Swift, D.D.*, ed. David Woolley, 4 vols. (Frankfurt am Main: Peter Lang, 1999-2007), I, p. 104. (以下, *Corr.* と略記。)
- (3) Swift to Thomas Swift (3 May 1692), *ibid.*, p. 109.
- (4) ギルバート・ハイエットは、ピンダロスとホラティウスを比較して「靈感と熟考、情熱と考案、興奮と静謐、天へ向かっての飛翔と大地の近くを低く静かに渡る行き方」というように、2人はまったく対照的であると述べている。Gilbert Highet, *The Classical Tradition: Greek and Roman Influences on Western Literature* (Oxford: Clarendon Press, 1951), p. 227 (柳沼重剛訳『西洋文学における古典の伝統(上)』筑摩書房, 1969年, 237頁)。
- (5) イングランドにおける頌詩の受容史については、古典的なものとしてはRobert Shafer, *The English Ode to 1660: An Essay in Literary History* (Princeton: Princeton University Press, 1918)がある。また、John D. Jump, *The Ode* (London: Methuen, 1974), pp. 10-36は要を得ていて有益である。
- (6) カウリーは優れた散文の書き手でもあり、「自由について」(“Of Liberty”), 「孤独について」(“Of Solitude”), 「偉大さについて」(“Of Greatness”)などの優雅なエッセイを含む『韻文および散文によるエッセイ』(*Essays in Verse and Prose*, 1668)が死後刊行されている。カウリーの生涯と著作については、以下を参照。Thomas Sprat, “An Account of the Life and Writings of Mr. Abraham Cowley,” in *The Works of Mr. Abraham Cowley* (London, 1668); Samuel Johnson, “Cowley,” in *Lives of the English Poets*, ed. George B. Hill, 3 vols. (1905; rpt. New York: Octagon Books, 1967), I, pp. 1-65 (原田範行他訳『イギリス詩人伝』筑摩書房, 2009年, 7-65頁); Alexander B. Grosart, Memorial-Introduction to *The Complete Works in Verse and Prose of Abraham Cowley*, ed. Alexander B. Grosart, 2 vols. (New York: AMS Press, 1967), I, pp. ix-cxlii; James G. Taaffe, *Abraham Cowley* (New York: Twayne Publishers, 1972); 佐山栄太郎『十七世紀中葉の詩人——マーズェルとカウリー』(研究社, 1956年), 130-240頁。
- (7) カウリーによれば、ピンダロス風オードは「韻文の中でも最も気高く、最も優れた部類の詩形である」(Abraham Cowley, Preface to *Pindarique Odes, Written in Imitation of the Stile and Manner of the Odes of Pindar*, in *Complete Works of Cowley*, II, p. 4)。しかし彼は、本来のピンダロス風頌詩が不規則なように見えて、実は一定の形式を有しているのを不規則なものと誤解し、それを不定形の自由な詩形、いわゆるカウリー風頌詩(Cowleyan ode)へと変えてしまった。「彼独自の頌詩」とはこの謂いである。
- (8) Johnson, “Cowley,” in *Lives of the English Poets*, I, p. 48 (原田他訳, 49頁)。
- (9) カウリーの名声とその衰退については、Arthur H. Nethercot, *The Reputation of Abraham Cowley (1660-1800)* (Philadelphia: n.p., 1923)を参照。
- (10) Swift to Thomas Swift (3 May 1692), *Corr.*, I, p. 110.
- (11) Pat Rogers, Introduction to *Jonathan Swift: The Complete Poems*, ed. Pat Rogers (Harmondsworth: Penguin Books, 1983), p. 15. (以下, *Complete Poems* と略記。)
- (12) Idem, A Note on Rhythm and Rhyme to *Complete Poems*, p. 39.
- (13) Swift to Alexander Pope (12 June 1732), *Corr.*, III, p. 490.
- (14) Swift to Charles Wogan ([July-] 2 Aug. [1732]), *ibid.*, p. 515.
- (15) Laetitia Pilkington, *Memoirs with Anecdotes of Dean Swift*, *Swiftiana XVII-XIX*, 3 vols. (1748-54; rpt. Garland Publishing, 1975), III, p. 161.
- (16) Philip Sidney, *The Defence of Poetry*, ed. Jan van Dorsten (Oxford: Oxford University Press, 1973), p. 61.
- (17) Jonathan Smedley, Preface to *Gulliveriana: Or a Fourth Volume of Miscellanies*, *Swiftiana VIII* (New York: Garland Publishing, 1974), p. xvi.
- (18) John Boyle, 5th Earl of Cork and Orrery, *Remarks on the Life and Writings of Dr. Jonathan Swift*, ed. João Fróes (Newark: University of Delaware Press; London: Associated University Presses, 2000), Letter X, p. 166.
- (19) “Character of Jonathan Swift, D.D., Dean of

- Saint Patrick's, Dublin," *European Magazine*, 18 (Nov. 1790), 332.
- (20) 19世紀に、感情の解放、想像力の復権、抒情性の称揚、美的なるものや無限なるものへの憧憬、自然との一体感、自我の拡大、個性の開花等の特徴とするロマン主義が隆盛すると、スウィフトに対する批判はいつそう強まった感がある。ちなみに、イギリス・ロマン主義文学の代表者の一人であるパーシー・ビッシュ・シェリーは、『詩の弁護』(*A Defence of Poetry*, 1840, writ. 1821)で次のように述べている。それは、醜悪なものを醜悪なものとして、気取りや修辭を排して対象をあるがままに詠んだスウィフトの詩観とは対照的である。「詩はあらゆるものを愛らしくする。最も美しいものをいつそう美しくし、最も醜いものに美を加える。歓喜と恐怖、悲しみと喜び、永遠と変化を融合させ、両立しないすべてのものを、軽くくびきにかけて結びつけようとする。詩は触れるものすべてを変質させ、詩の存在の輝きの中を動くあらゆるものは、驚くべき共感によって詩の生ける精霊の化身となる。詩の秘密の錬金術は、死から生へと流れる毒水を黄金水に変え、この世から日常性というヴェールを剥ぎ取って、その魂とも言うべき裸身の眠れる美をあらわにする」(Percy Bysshe Shelley, *A Defence of Poetry*, in *Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts Criticism*, ed. Donald H. Reiman and Sharon B. Powers [New York: W. W. Norton, 1977], p. 505. 岡地嶺訳編『イギリス詩論集(上)』中央大学出版部, 1980年, 519頁)。
- (21) Francis Jeffrey, "Book Review of *The Works of Jonathan Swift, Containing Additional Letters, Tracts, and Poems*, ed. Sir Walter Scott," *Edinburgh Review*, 27 (Sept.-Dec. 1816), 49-50.
- (22) Leslie Stephen, *Swift, English Men of Letters* (London, 1889), p. 205 (高橋孝太郎訳『スウィフト伝——「ガリヴァー旅行記」の政治学』彩流社, 1999年, 256頁)。
- (23) Leigh Hunt, *Wit and Humour, Selected from the English Poets; with an Illustrative Essay and Critical Comments* (London, 1846), p. 308.
- (24) *Ibid.*, p. 310.
- (25) James Russell Lowell, *Literary Essays*, 4 vols. (Boston, 1891), III, p. 153.
- (26) Hippolyte Taine, *Histoire de la littérature anglaise*, 5 tomes [Paris, 1873-74], IV (*Livre III: L'Age classique*), pp. 44-46 (手塚リリ子・手塚喬介訳『英国文学史——古典主義時代』白水社, 1998年, 333-35頁)。
- (27) Oliver Goldsmith, *The Beauties of English Poesy in The Collected Works of Oliver Goldsmith*, ed. Arthur Friedman, 5 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1966), V, p. 323.
- (28) 「スウィフト博士の詩的作品には、批評家はその力量を発揮できるころはあまりない。それらはしばしばユーモアに富んでおり、ほとんどいつも軽快で、詩的作品を魅力あるものにする特質、つまり言葉の平明さと内容の陽気さを備えている。それらは大部分が作者に意図されたものである。用語は正確、韻律は滑らか、押韻は厳密である。苦心の跡が見える表現も、余分な形容語句も滅多に見られない。彼の詩はすべて、彼自身の定義する良き文体を例証しており、それらは『適切な場所に置かれた適切な言葉』から成っている」(Johnson, "Swift," in *Lives of the English Poets*, III, p. 65. 原田他訳『イギリス詩人伝』514頁)。
「スウィフトの詩人としての名声は、彼の散文作品のより際立った輝き、その持ち前の力、および独創的な才によっていくぶん覆い隠されてきている。しかし、もし彼が『桶物語』も『ガリヴァー旅行記』も書かなかったとしても、純粋に詩人としての彼の名はわれわれに伝わったことであろうし、当然の名誉に包まれて後世に残ったことであろう」(William Hazlitt, *Lectures on the English Poets in The Collected Works of William Hazlitt*, ed. A. R. Waller and Arnold Glover, 12 vols. [London: J. M. Dent & Sons, 1902-906], V, p. 109)。
- (29) George Watson (ed.), *The New Cambridge Bibliography of English Literature*, vol. II, 1660-1800 (Cambridge: Cambridge University Press, 1971), 1056-57.
- (30) この詩集にはいくつもの書評がある。その1つにジョン・スパローのものがあるが、彼は、「スウィフトは……詩人ではなかった。詩の内容においても様式においても、また精神においても彼は詩人の才能を示していない」と、なおも厳しい評価を下していた。John Sparrow, "Book Review of *The Poems of Jonathan Swift*, ed. Harold Williams," *Review of English Studies*, 15 (1939), 225-26.
- (31) 20世紀の中葉以降、スウィフトの詩に関する論考は数多く発表されている。ここでは主要な研究書のみ挙げておく。Nora Crow Jaffe, *The Poet Swift* (Hanover, NH: University Press of New England, 1977); John Irwin Fischer, *On Swift's*

Poetry (Gainesville: University Presses of Florida, 1978); Peter J. Schakel, *The Poetry of Jonathan Swift: Allusion and the Development of a Poetic Style* (Madison, Wis.: University of Wisconsin Press, 1978); A. B. England, *Energy and Order in the Poetry of Swift* (Lewisburg: Bucknell University Press; London: Associated University Presses, 1980); Louise K. Barnett, *Swift's Poetic Worlds* (Newark: University of Delaware Press; London: Associated University Presses, 1981); John Irwin Fischer, Donald C. Mell, Jr., and David M. Vieth (eds.), *Contemporary Studies of Swift's Poetry* (Newark: University of Delaware Press; London: Associated University Presses, 1981); Robert C. Elliott and Arthur H. Scouten, *The Poetry of Jonathan Swift: Papers Read at a Clark Library Seminar, 20 January 1979* (Los Angeles: William Andrews Clark Memorial Library, 1981); David M. Vieth (ed.), *Essential Articles for the Study of Jonathan Swift's Poetry* (Hamden, Conn.: Archon Books, 1984); Ellen Pollak, *The Poetics of Sexual Myth: Gender and Ideology in the Verse of Swift and Pope* (Chicago: University of Chicago Press, 1985); James Woolley, *Swift's Later Poems: Studies in Circumstances and Texts* (New York: Garland Publishing, 1988); 和田敏英『スウィフトの詩』(九州大学出版会, 1993年)。

(32) Fischer, *On Swift's Poetry*, p. 5.

(33) F. Elrington Ball, *Swift's Verse: An Essay* (1929; rpt. New York: Octagon Books, 1970), p. viii.

(34) ロラン・バルト／花輪光訳『物語の構造分析』(みすず書房, 1979年), 84頁。

(35) 拙稿「ダブリン・トリニティ・カレッジ時代のスウィフト」(『山梨大学教育人間科学部紀要』第4巻1号, 2002年), 180-81頁を参照願いたい。

(36) スウィフトがカウリーに夢中になっていた期間はさほど長くない。それでも、カウリーの頌詩を評価する姿勢はしばらく続き、1704年に出版された『書物合戦』(*The Battle of the Books*)でも、「思うにカウリーの『ピンダロス風オード』は、彼の『ザ・ミストレス』よりはるかに勝る」(Jonathan Swift, *The Battle of the Books*, in *The Prose Writings of Jonathan Swift*, ed. Herbert Davis et al., 16 vols. (Oxford: Basil Blackwell, 1939-74), I, p. 159, n.; *Cambridge Edition of the Works of Jonathan Swift*, gen. ed. Claude Rauson et al., 17

vols. (Cambridge: Cambridge University Press, 2008-), I, p. 159, n.)と注記している。(スウィフトの全集は、以下、それぞれPW; CWJS と略記する。)

- (37) H・E・ウッドブリッジは、「17世紀においてこれほど数多く、これほど重要な文学史の問題を取り上げたエッセイはほかにはない」(Homer E. Woodbridge, *Sir William Temple: The Man and His Work* [New York: Modern Language Association of America; London: Oxford University Press, 1940], pp. 298-99)と述べている。
- (38) テンプルによれば、「真の詩は熱情を高め、それを抑え、変化させ、失わせ、歓喜と深い悲しみを和らげ、愛と恐怖心を強め、否、恐怖心を大胆さへ、愛を冷淡さへ、また憎しみそのものへと転化させる力を持っている」(William Temple, *Of Poetry*, in *The Works of Sir William Temple, Bart*, 4 vols. [London, 1770], III, p. 398)。戦意を喪失していたスパルタ軍が、雄々しさを取り戻したのはエレゲイア詩人のテュルタイオスの詩歌によってであった。また、シチリアのアクラガスの僭主であるファラリスが、その残忍さを優しさや敬愛へと変えたのはステシコロスの頌詩によってであった。詩は絶大な力を持っている。けれども、それは不思議なことではない。「というのも詩には、人間の心に非常に強い感銘を与えることのできる雄弁、音楽、絵画の力がことごとく集められているからである」(*Ibid.*)。

詩がこのような威力を備えているということは、取りも直さず、詩人が卓越した才能を持った存在であるということの意味する。テンプルによれば、ギリシア人とローマ人は詩人を預言者や創造者に等しき存在と見なし、詩人の中に神のごとき力が宿っていると考えていた。もっともテンプルは、詩の起源を神的に捉えるのではなく、あくまでも人間的なものとして把握する。なぜならば、詩とは「この上なく優れた天性の気質、もしくは最も偉大な生来の才能から生み出される」ものであって、決して「人間的なものの手の届かぬようなものではない」(*Ibid.*, p. 396)からである。したがって、テンプルは詩の源泉はあくまでも人間の側にあるとするが、にもかかわらず、テンプルにとって詩人の才能は、神的なまでに絶対的なものであった。そして詩人に求められる能力とは、「詩の母である創造力」、「活力に満ちた想像力」、「生き生きとした機知」、「良識と健全な判断力」、「創作意欲をかき立てる興奮」、「自然と人為について

- の一般的知識」等々であるとするのである (*Ibid.*, pp. 401-402)。
- (39) *Ibid.*, pp. 403-404.
- (40) *Ibid.*, p. 404.
- (41) *Ibid.*, p. 410.
- (42) *Ibid.*, p. 421.
- (43) *Ibid.*, p. 420.
- (44) *Ibid.*, pp. 421-22.
- (45) *Ibid.*, p. 422.
- (46) William Temple to Lord Lisle (Aug. 1667), in *Works of Temple*, I, p. 303.
- (47) Temple, *Of Poetry*, in *Works of Temple*, III, p. 423.
- (48) Temple, “Heads, Designed for an Essay upon the Different Conditions of Life and Fortune,” in *Miscellanea*, Part III (London, 1701), p. 292.
- (49) Temple, *Of Poetry*, in *Works of Temple*, III, p. 423.
- (50) もっとも、テンブルは諷刺文学を全面的に否定したわけではなく、セルバンテスの『ドン・キホーテ』は例外的に高く評価している。その理由は、『ドン・キホーテ』における諷刺は、ラブレーのようなスタイルや方法に依拠しておらず、悪意があるわけでも、淫らで冒瀆的であるわけでもないからである。 *Ibid.*, p. 422.
- (51) *Ibid.*, p. 403.
- (52) テンブルの詩は、収録数は一定していないが、*Poems by Sir W.T.* (n.d., Privately printed); *Miscellanea*, Part III, pp. 337-68; *Works of Temple*, III, pp. 532-44; G. C. Moore Smith (ed.), *The Early Essays and Romances of Sir William Temple Bt. With the Life and Character of Sir William Temple by His Sister Lady Giffard* (Oxford: Clarendon Press, 1930), pp. 181-89に収載されている。
- (53) Temple, *Of Heroic Virtue*, in *Works of Temple*, III, p. 304.
- (54) Temple, *Of Poetry*, in *Works of Temple*, III, pp. 427-28.
- (55) Swift to Thomas Swift (3 May 1692), *Corr.*, I, p. 110.
- (56) Gerald John Pierre, “The Influence of Sir William Temple upon the Mind and Art of Jonathan Swift,” Ph.D. dissertation, University of Minnesota, 1970, p. 22.